

## 書評

## 西岡力著『韓国の大統領はなぜ逮捕されるのか』

久保田 るり子 (産経新聞編集委員)

5年ぶりの政権の交代で、韓国に尹錫悦政権が誕生した。韓国は、前政権の文在寅時代に1948年の建国以来の民主主義が否定されるほどの変質を強いられた。この国の革新政権は金大中、盧武鉉に次ぐ3度目だが、文在寅政権が行った行政、立法、司法の全分野にまたがる社会改造は、韓国の土台を揺るがすものだった。過去の左派政権とも比べものにならないその変化こそが日韓関係を戦後最悪に至らせ、米韓関係も破壊した。では、文政権が目指した左派継続を、0.7%の得票率の僅差で阻止して登場した尹錫悦政権は、文時代の「負の遺産」を修正して韓国を正常化できるのだろうか。

少々、挑発的なタイトルの本書は、現在の韓国の病巣を鋭くえぐっている。実は副題である「北朝鮮対南工作の深い闇」が隠されたメインテーマである。朝鮮半島は南北分断の当時から、イデオロギー内戦が連綿と続いてきた。北朝鮮の思想攻勢に押されてきた韓国には、「従北」という病巣が広がってきた。その病巣から生まれたのが文在寅政権だった。こうした構造を知らなければ、現在の朝鮮半島情勢、特に韓国の政治状況は説明もつかなければ理解もできない。

「保守」を旗頭に大統領となった尹錫悦氏は、実力派検事として朴槿恵捜査の陣頭指揮を取り、文在寅時代の創始にかかわった経歴の持ち主である。親文から反文に転じた尹氏は、法律家として「法と正義に従った」としたが、では大統領としての尹氏の軸がどこにあるのか、まだはっきりとは見えない。副題の「深い闇」という問題意識から韓国政治を語る研究者は、現在の学界で西岡氏をおいてほとんどいない。氏はその先駆者であり、そしてトップランナーである。本書は、尹錫悦政権の今後を読むうえで重要な視点を与えている。

## 文在寅の「反日反韓史観」は危険な革命思想だった

私たちには、韓国の地上で起きていることしかみえない。しかし、朝鮮半島の地下に流れる北朝鮮勢力による政治工作は、南北分断の1945年から始まっている。北朝鮮の住人だった文在寅氏の両親も、米軍の用意した米貨物船『メロディス・ビクトリー号』で南に逃げた避難民だが、大挙して逃げた人々のなかにはスパイも紛れ込んでいた。文氏の出自にはナゾが多い。48年、韓国の済州島では韓国で結成された南朝鮮労働党の共産主義者が武装蜂起した。朝鮮戦争ではじまった50年代は、越北していた南労党の幹部が金日成によって粛清された。60年代には北朝鮮は韓国に地下革命党「統一革命党」を作り、地上を支配しようとマルクス主義者を育てた。70年代、80年代に政治工作は韓国の大学、学界、宗教界、労働界、言論界、芸術界に深く浸透し、21世紀になると韓国国会に北朝鮮系の従北政党が進出するまでに至った。

現在の韓国の従北浸食について、西岡氏は元朝鮮労働党工作部門、偵察総局の幹部だっ

た金ククソン氏(仮名)がもたらした情報を紹介している。金氏は2009年に金正日の指示で対南対米戦略を作った。それは「韓国の政治隷属化」だった。韓国の従北勢力を使い、保守を没落させ、韓米同盟の破壊を最終目的とした。「金正日は2006年、『これ以上、工作員を派遣しなくてもよい』と判断した」と金氏は証言している。すでに韓国には北朝鮮の指令通り動く従北左派が十分、育っていたからだという。金ククソン氏は2014年、韓国に亡命するまで常に北朝鮮の対南工作部門の中枢にいた、秘密工作を知る最高幹部だ。

その従北左派を支配している歴史観が、「反日反韓史観」である。反日反韓史観とは、大韓民国を日本の植民地時代に協力者だった親日勢力が建国した国として否定する、極めて歪んだ歴史観である。大韓民国は間違っただけで建国され、汚れた存在であるとし、その建国を土台とした李承晩や朴正熙を「親日反民族勢力」と貶める。その勢力と戦うことこそが「民主化」であり、親日派を抹殺した金日成は英雄であり、北朝鮮にこそ正統性があるとの史観だ。80年代、大学生に爆発的に読まれた左翼学者らによる「解放前後史の認識」というシリーズ本が広めた思想で、文在寅大統領はこの史観の信奉者だ。

西岡氏は、文在寅大統領の執権を貫く思想を「反日反韓史観に則った危険な革命思想」として明解に読み解いた。文氏は「自分が政権を取ったら親日派を清算し、韓国の主流を交代させると」宣言して大統領になった。保守勢力を「腐敗大掃除する」と述べ、秩序、体制、勢力の歴史交代を掲げた。李明博、朴槿恵政権時代に政権を支えた政治、経済、文化の人材を「積弊」(古い悪弊)として次々に逮捕した。

「親日派」で「汚れた韓国」を作った朴正熙の娘である朴槿恵氏は、「反日反感史観」の革命思想のターゲットであった。文政権時の大統領府は、秘書官の4割を80年代の活動家が占めた。革命政権は、朴槿恵、李明博の2人の前職大統領を逮捕し、文氏は金正恩総書記との首脳会談で訪朝した折に、自らを「南側の大統領」と述べた。

韓国の憲法は北朝鮮地域も韓国の領土に含めており、北側は不法に占拠されているとの位置づけである。「南側の大統領」とは本来であれば違憲の発言だが、朴槿恵弾劾で解体された韓国保守に、文政権を批判する力はなかった。文政権の「反日反韓史観」を真っ向から批判する「反日種族主義」が韓国で出版されたのは、2019年7月だ。反日史観への学術実証論文として、韓国の危機を訴えたが、文政権与党はこの著者グループのリーダー、李榮薫前ソウル大学教授や、慰安婦問題で李氏の研究成果を紹介した柳錫春前延世大学教授を刑事告訴し、文在寅政権の言論空間への弾圧が続いた。

西岡氏は文政権の「革命」のゴールを、「金正恩個人独裁全体主義政権に韓国全体を差し出す赤化統一だ」と分析した。徴用工賠償判決は文政権の司法革命の成果であり、日韓関係を最悪に持ち込んだ国際協約、協定の無視(1965年体制、日韓請求権協定)は「革命」の一部だったとみる。こうした指摘は示唆に富んでいる。徴用工や慰安婦問題で65年体制に異議を唱えておくことは、将来の日朝交渉で北朝鮮が日本に対し優位に立つ、格好の材料になり得るからである。

### 朴槿恵弾劾の向こうに「北の闇」

北朝鮮の対南工作の「闇」の深さを実証的に書きこんでいるのが、第3章の「従北勢力が仕組んだ弾劾運動」と第4章の「北朝鮮と朴槿恵の隠れた戦い」だ。本書の特徴は全編を通じ、過去の検証を韓国の内部資料で裏付け、細部にわたって実証している点にある

が、この2章には他の追従を許さない西岡氏の情報力（公開資料ではない内部資料収集とヒューミント＝人的情報）が発揮されている。

朴槿恵大統領は、「友人の崔順実を国政に関与させ、国家権力で私益を追及させた」などとして弾劾訴追され、憲法裁判所の宣告で失職、職権乱用や収賄などの18件もの罪状で起訴された。弾劾への進行を勢い付かせたのが、メディアの朴攻撃だった。進歩メディアだけでなく、保守サイドの有力新聞がこぞって反朴槿恵報道を過熱させた。さらに従北勢力はあらゆる階層に大衆動員をかけて、大規模デモや野外集会を仕掛けた。西岡氏は「朴槿恵弾劾と逮捕は法治主義に対する『人民裁判』だった」とデモの正体、訴追内容の不法性やずさんなどを詳細にレポートしている。そして「日本のマスコミが報じてこなかった事態の本質を論じたい」と言明した。日本マスコミの一端に属する私には、ぐうの音も出ない正論であった。

反朴槿恵デモを主催した団体はいずれも労組、政治、教育、女性などの左翼団体で、その核心には韓国の国家保安法（反共防諜法）に指定されている、北朝鮮とつながる極左団体3団体が入っていた。団体のルーツをたどれば、北朝鮮が対南工作の一環として作った組織も入っていた。市民デモの主体となった「闘争本部」の掲げた要求は、朴槿恵追及ではなく文政権への政治要求で、例えば「国家保安法廃止」や「国情院廃止」など、北朝鮮の文政権への要求そのものだった。

デモを背景に国会で進められた弾劾訴追案は、韓国マスコミの報道を根拠にしたズサンきわまりない代物だった。証拠として添付されたのは起訴状と新聞記事だけで、裁判は確定していなかったにもかかわらず、朴氏は訴追された。なぜ、朴槿恵氏は人民裁判のようなデモにさらされ、従北勢力の包囲網に追い詰められて、大統領の座から引きずりおろされなければならなかったのか。それは「弾劾の裏に北朝鮮と朴槿恵氏の暗闘があった」というのが、西岡氏の結論だ。

朴槿恵政権は北朝鮮内部の反政府組織を支援していた。その組織は金正恩暗殺計画を進めていた。暗殺計画に具体的な支援をしたかはナゾだが、少なくとも後方支援は行っていたものとみられる。概要はこうだ。2017年、北朝鮮内部の反政府組織による金正恩暗殺未遂事件が起きた。化学兵器が使われた。組織は韓国の情報機関、国家情報院（国情院）とつながっていた。反政府組織の暗殺計画は実行直前に発覚、首謀者7人が処刑されてしまった。

西岡氏が暗殺未遂事件の情報を最初に得たのが2018年2月。韓国の『月刊朝鮮』が暗殺未遂事件発生と、「朴槿恵政権はこの反体制組織を支援していた」との証言を報じたのが同年5月だった。実際の未遂事件発生は2017年5月だった。この後、北朝鮮は6月末、「わが最高首脳部を害する凶計を準備した国家テロ犯罪者を極刑に処することを内外に厳粛に宣言する」と声明を出し、朴大統領と李炳浩国情院長（当時）を「特大型国家テロ犯罪者として極刑に処する」として、北朝鮮への引き渡しを要求していた。だが、詳細は不明のままだった。

2019年になると、反体制組織に力を貸していた韓国人の北朝鮮民主活動家が、自らの実名で彼らへの支援について『月刊朝鮮』で証言を始めた。西岡氏はすぐソウルに飛び、かねてからの知人でもあったこの人物から、細部にわたる話を直接聞いた。

本書では、反体制組織が金正恩暗殺未遂事件を起こすまでに、すでに10年の歴史が

あったこと、ほかにも北朝鮮内部には反体制組織があったこと、彼らが何を考えているかということ、危険を承知で韓国の情報機関との協力関係を申し出ていたことなど、驚くべき事実が詳報されている。そして海外で事件の準備をしていた首謀者は、暗殺実行のため2016年秋、北朝鮮に戻り、連絡が途絶えたという。

首謀者の北朝鮮帰国とほぼ平行して、朴槿恵スキャンダルが韓国で持ち上がり、反朴槿恵運動が一気に拡散し、2017年3月、朴槿恵大統領は弾劾され、5月に文在寅政権が誕生した。同時期に北朝鮮では、金正恩暗殺未遂事件が摘発された。

朴槿恵政権は、韓国の従北勢力に正面から対抗した政権だった。朴政権について日本メディアは日韓関係だけに焦点を当てていたが、朴政権の対北政策の意味するところをしっかりと捉えていれば、その後の反朴槿恵運動の見方も変わったはずだった。

朴槿恵政権は2013年9月、従北政党「統合民主党」リーダーの李石基議員を「内乱陰謀罪」で逮捕した。西岡氏は、韓国の「従北」とはいかなる勢力なのかを、李石基の正体を暴くことで実証した。李石基を逮捕した国情院が捜査内容を記録した文書や音声記録を入手し、日本ではまったく知られていない韓国の地下組織の実態に迫った。朴政権は同年11月、統合民主党を憲法裁判所に提訴、その審判により同党は強制解散となった。半世紀を超える政界工作に成功してきた従北勢力にとって、手痛い敗北となったのは間違いない。

朴槿恵大統領は、国情院が立案した「北朝鮮体制転換計画」にサインしていたとされる。また2016年夏の光復節（日本統治からの解放記念日）演説で「真の解放は統一大韓民国」と述べて、北朝鮮の金正恩体制を否定していた。朴政権の対北強硬姿勢が北朝鮮の反体制組織と結びつき、金正恩の暗殺計画が実行に移されようとしていた矢先に、突然巻き起こったのが「崔順実スキャンダル」と反朴槿恵運動による弾劾への動きだった。そして朴槿恵政権は倒された。弾劾劇が北朝鮮と従北勢力の共謀だった可能性が浮かんでくる。

尹錫悦政権はこれから、有権者の半数を占める左派とその核心にいる組織化された従北勢力と闘うことになる。従北勢力の尹政権への攻勢は始まったばかりである。彼らは死力を尽くして尹政権を潰しにかかるだろう。そして勝負を決するのが、文在寅前大統領の逮捕の行方、ということになる。本書はその激突の意味を教示している。タイトルをちょっとお借りすると、「韓国の元大統領はなぜ逮捕されたのか、そしてこれから前大統領は逮捕されるのか」ということになる。

（草思社、2022年刊）